

驚くべき詩精神の燃焼

広部英一

館高重（明治三十七年〔昭和六年〕の生涯と仕事について、私は、これまで『金津町史』に掲載されている記事以外には何も知らなかった。

しかし今回、詩人館高重の全貌を伝えるとていい、かなりの量の詩作品に触れ、まず思ふのは享年二十七歳という、その短かった生涯の間に、館高重は実に充実した仕事をしたということである。その詩精神の燃焼の烈しさは、まさに驚異の一語に尽きる。大正八年、福井農林学校に入学。この頃から雑誌『ひとむれ』『フリジヤ』を拠点に文芸活動を始めたといわれるが、大正十三年、岐阜高等農林学校に入学して、館高重は本格的に詩と取り組んだ。在学中は「机の中にはいつも大きな蠟燭を用意して、十時の消灯後は蠟燭の光を頼りに、熱烈な研究が続けられた」というエピソードが伝えらるゝとあり、岐阜在住の詩人たちと切磋琢磨しながら、また、当時、金津町六日に結社を置いた雑誌『群衆人間』の編集同人として詩を発表するなど、青春時代のすべてを賭けるかのような文学へのあくなき精進が日課であった。岐阜高農卒業の春、すなわち昭和二年三月五日に発行した第一詩集『感情原形質』は、この学生生活における精進の成果の集大成であった。

『感情原形質』に収録された作品は全部で四十篇。序を馬米田静秋が、跋を多賀圭三郎が書いている。作風でまず気付くのは、使用されている言葉が自由で平明であるということである。

このことを大正末期から昭和初期にかけての日本詩壇の状況を背景に鑑賞してみると、館高重の文学が極めて敏感に詩壇の時流に反応し、息づいているかが伺われてくる。大正末期から昭和初期にかけて

の詩壇状況は、いうまでもなく機関誌『日本詩人』（大正十年〔大正十五年〕年刊アンソロジー『日本詩集』を刊行していた「詩話会」が中心勢力で、福土幸次郎、百田宗治、川路柳紅、白鳥登吾などが有力詩人であった。この詩壇の主流は「民衆派」と呼ばれていた。館がこの「民衆派」の影響を受けていたことは、「民衆派」が常に「自由で平明な言葉」を旗印の一つにしていたことからみて、まちがいがなだらう。

この「民衆派」の活動は、大正末期に至って衰退し、かわって新風として『驢馬』（大正十五年刊）『赤と黒』（大正十二年刊）『青空』（大正十四年刊）などの詩誌活動があらわれてくるのだが、これも昭和二年の『日本プロレタリア詩集』と昭和三年の『詩と詩論』の創刊によって、日本詩壇に現出した大正末期から昭和初期にかけての風面の転換は全く決定的となったのである。

つまり館高重は、詩の主潮が芸術的・思想的に変遷を遂げつつある時代の流れの中を、一地方に生きて仕事を推進したのである。

作品「魚」は『感情原形質』の巻頭に飾られた一篇であるが、新時代に相応しい詩の世界を切り開いていこうとする、この詩人の野心と自身に満ち満ちた、若々しい気持ちが、出発に際しての決意と共に比喩的に表現されていて、一人の若い詩人の口吻までがしのばれる佳篇である。

館高重の文学の世界にかけた夢が、いかに大きなものであったかは、この「魚」をみてさえ理解できるところであるが、大正十四年九月一日発行の『群衆人間』第三輯の同人語欄の館の文章「がんはつてみせる」もまた、館の尋常でない意欲と情熱のほどを示す一文である。この文章中に、館高重は「死ぬまでがんばる……」と記しているが、夭折という薄幸の生涯であったことを思い合わせると、この箇所には、特に心うたれる。

第一詩集『感情原形質』の上梓によって、一躍、新鋭詩人としての声価を高めた館高重は、岐阜高農

の助手として、しばらくは岐阜の地に生活したが、昭和二年七月、肋膜炎を患い、帰郷した。間もなく小康を得るや、昭和三年一月に詩誌『詩業季』を創刊し、以後、福井詩界において着実に仕事を積んでいった。

昭和三年四月に結婚したが、この幸福もわずかな日々にすぎなかった。七月に妻が死んだのである。「二才で母に別れ、十一才で一人の兄に別れ、十二才で最後の父を失って、家庭的には実に悲慘の極みであった。生来明朗で快活であった鍾氏も、重なる不幸によって憂愁は拭うべくもなかった。〈金津町史〉この「悲慘の極み」の生活の中で、次々に生んでいった珠玉作品を集めて、昭和三年十月十五日に第二詩集『爪を眺める』を刊行したのである。序文は庄山桐実、跋文は庄山慎一郎である。詩集『爪を眺める』の扉には「若くして逝ける妻菫子の霊にまるる」と記されている。

詩集『爪を眺める』には二十七篇の作品が収められている。十行前後の短い作品が殆どである。落ち着いた、静かな観照がもたらす詩的境地には、透き通った生命感が響いていて、八木重吉の詩の世界と似通ったものを感じる。関係資料の中に『日本詩選集・一九二八年版』（昭和三年一月刊、改革詩壇社）があるが、この選集に北川冬彦・草野心平・萩原朔太郎・春山行夫・堀口大宇らと並んで、館高重の「落葉」「秋の夜」「細い手」の三篇が掲載されている。「秋の夜」「細い手」は『爪を眺める』にも収録されている。この「落葉」「秋の夜」「細い手」が表出している孤独感と人生の悲哀は、そのまま最愛の妻を失い、病気を背負う館高重の内側にしたたつてやまないものである。

また「靈柑」という作品があるが、この作品について館は、昭和三年十二月一日発行の『詩業季』二十八号の編輯後記で、次のように書いている。「重忠を看護してくれた亡妻に今更ながら涙ぐましい気持ちを抱せている。巻中「靈柑」の詩など、妻が毎日母に叱られてまでも買ってきてくれた靈柑を食べながらもただだけに面影が深い。まお同著（筆者註『爪を眺める』）の殆ど半は僕の口づさむのを妻

が筆記しておいてくれたものであるだけ又忘れ難いものである。「この第二詩集『爪を眺める』が亡妻の靈前に手向けられたゆえんがここにある。

第二詩集『爪を眺める』を刊行した昭和三年の暮れになると、肋膜炎が再発、翌年、石川県の温泉に転地療養するなど詩誌活動は中断する。昭和五年九月にいたって病状はいよいよ悪化し、絶対安静となった。そして昭和六年二月十四日、ついに不帰の客となった。「こくなる数日前にポカポカと暖かい日があつて、急に籠の小鳥がさますり出した。すると、『おかあさん、いい詩になるよ』と、継母に言ったが、ついに詩にならないでしまった。」館高重は最後まで詩を忘れなかった。

私は、この稿を走り書きしながら、いたずらに馬脚を重ねてきた自分の怠惰をムチ打たれる思いであつた。

館高重、この詩人の名前を、もう忘れることができない。

（詩人・清水町立図書館館長）